

[16_3] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :
16(3)

<https://doi.org/10.15017/17976>

出版情報 : 図書館情報. 16 (3), pp.33-42, 1980-09-30. Kyushu University Library
バージョン :
権利関係 :

九州大学附属図書館報

図書館情報

The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 16, No. 3 (1980, 7~9)

附属図書館長就任のあいさつ

塚原博

このたび岡村前館長のあとを受けて、附属図書館長の重責を担うことになったが、わたしには情報図書館学などという図書館に関する専門的知識は全く持ち合せていない。わたしが図書や雑誌について知っていることと言えば、関係する専門図書と学術誌は当然のこととして、一般の新刊図書や雑誌について、大学人として誰でも興味をもっている程度のことでしかない。

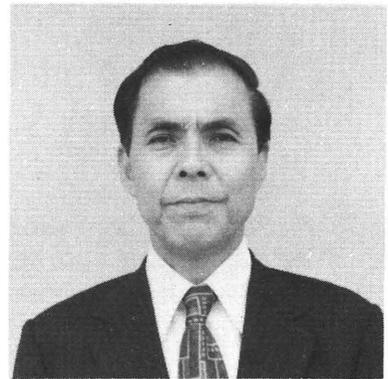
その私が館長をおひき受けしたのは、ご推せんによって引き出されたわけではあるが、私なりに新しい九大図書館のあり方を模索する必要性を感じていたからである。館長になって既に2ヵ月を過ぎようとしているが、この感は実のところますます高まりつつある。しかし現在のところ、これが成案や体系的具體策を、わたしが持っているわけではない。

そこで、九大図書館は現状でいいのかと大学の皆さんに問いかけることから、今後の基本的構想づくりと具體策の取りくみに入りたい。大学図書館として、今日の研究教育施設の拡大と多様化並びに増大する研究者と学生の要請に対応し、知的生産の場としての機能を十分果していると、現状をもって言えるであろうか。歴代の館長や各部局の責任者の努力によって、本学の図書館組織は、中央図書館、医学分館、教養部分館並びに各部局図書室と、それぞれに整備されてはきたが、体系的に研究教育と勉学学習上から学術図書の集積保存が行われ、資料の検索や高度活用の機能化が総合分担しあっているとは言えないであろう。

中央図書館を例にあげても、十数年前の図書館体系のマスタープランによって箱崎キャンパスに作られたが、その内容はその地区の学習図書館の役割りは果しているとしても、研究情報図書館としては理学部と農学部のみを学術資料を中心としている。工学部及び文系4学部の研究情報図書館としての機能はもっていない。これらの学部の図書館体系について、早急に方向性を検討する必要がある。医学分館としても、医学部地区3学部の体制づくりを配慮せねばならない。この春、教養部分館は施設について面目を一新したが、その活用と運営には一段の努力を必要としている。また春日地区の図書館構想とその実現には全学の絶大な協力を必要とするであろう。

いっぽう図書館の職員構成は、組織上から中央館職員と各部局図書職員とに分かれ、複雑な配置となっており、事務量の適正化と能率の向上を図る必要がある。部局図書室の資料整理には、かなりの渋滞がみられるともいう。今後とも図書専門職員として、担当すべき業務は増大しつつあり、その資質の向上を図るため、一層の研修と業務の技術的開発について研究心を高めてもらいたい。このため図書館にも研究的予算を必要としている。

また図書館経費もかなり不足度の高い状態で、全学の振替え経費に依存し、その運営経費にくわえて中央の図書購入費は、情報時代に逆行して漸減傾向にある。本来、図書館として新刊図書と雑誌は、漏れな



く取り揃えることが必要であるが、各部局の分担収集や他大学との相互利用の体制を活用して、出来るだけの整備と利用者の便益を図る必要がある。

このように、九大図書館が早急に解決を迫られている諸問題は、かなり多岐にわたっているが、何としても九州地区大学のセンター館としての機能を果たすためには、全学にはかって、まず今後の基本的構想を確立して、それぞれの具体的方策の推進を図らねばならない。このところ、中央館として図書館業務の電算化が、分館と各部局図書室並びに関連他大学との間で進められている。また昨年から開館時間を午後8時まで延長して、図書館の活用を図っている。

以上、九大図書館の現状と諸課題をみつめつつ、これからの私の任期の3年間に、新しい九大図書館像を求めて、その整備に努力する覚悟である。図書館は最も静かで清潔な環境を保つ必要があり、館員一同誠意をもって利用者へ接し、館内が教官と学生で静かな賑わいをみせ、研究教育と学習の大学的雰囲気醸成されることを願っている。どうか活力ある知的生産図書館として、ひとりでも多くの皆さんの参加を頂き、全学の各部局の理解とご支援のもとに整備と発展にご協力をお願いする。

(つかはら・ひろし：附属図書館長)

ミシガン大学の図書館

浜田哲郎

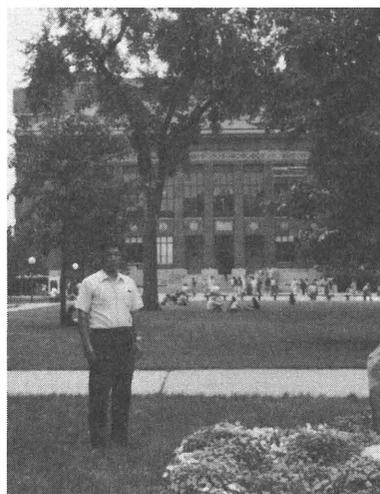
ミシガン大学の図書館は大学院図書館、学部図書館、その他、20の分館図書館、それに歴史図書館、科学図書館のような7つの特別図書館で構成されています。

蔵書数は約500万冊、(マイクロフィルムは除く)これは全米大学の順位でいうと、第1位、ハーバード大学の954万冊、次いで、エール大学688万冊、イリノイ大学582万冊、第4位がミシガン大学(1978年現在)です。九州大学の蔵書数は約204万冊ですが、これは第27位のアイオワ大学の205万冊に匹敵します。米国のピック大学はいずれも歴史も古く、大学のサイズも大きいので蔵書数の多いのは当然かも知れません。

ミシガン大学のツアーの見所には、美術館、博物館、10万人収容出来るアメリカンフットボール・スタジアム、学長官舎の外に、大学院図書館があります。

大学にとって図書館のシステムは中枢に当り、その代表的な図書館は大学の顔とも言えましょう。ミシガン大学院図書館は正面の北館は5階、南側につながっている書庫ビルは8階の威容を誇る堂々たる建造物で、キャンパスのほぼ中央に位置しています。その前には広々とした芝生の広場があり、学生の憩いの場になっています。ミシガン大学の蔵書の約半分が、この大学院図書館に収納されています。

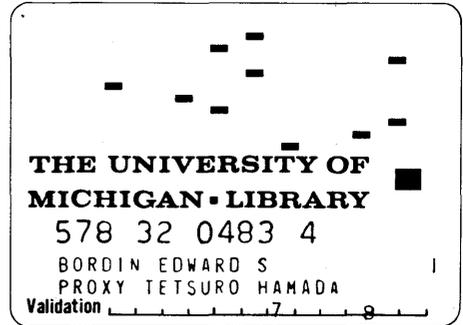
主として、大学院図書館を中心に、ユーザーとして感じたことを述べて見たいと思います。第一は、開館時間のことです。シーズンによって多少の差異がありますが、秋・冬学期(9～4月)は、平日8.00～24.00、土曜日10.00～18.00、日曜日13.00～24.00となっており、学部図書館ではさらに長く、平日は9.00～翌朝の4.00、土曜日は夜中の2.00までになっていました。ユーザーが、夜遅くまで、あるいは徹夜でも勉強出来るように開館されているわけです。これこそ本当の大学だと感心しました。九州大学教養部分館のように、平日は19.00、土曜日は15.00までとは月とスッポンの違いです。ミシガン大学は州立です(ミシガン州立大学と間違われます)が、月謝が高く、外国人学生の場合一学期2,300ドル(医・歯・理工系は



ミシガン大学大学院図書館の正面と広場(人物は筆者)

もっと高い) もしますが、教授陣や設備、施設の立派さからすれば、なる程とうなずけます。図書館のシステムも月謝に見合うものだと思います。夜中に閉館しても学生は大学のバスで、広いキャンパスに散在するアパート群や学生寮にちゃんと送ってもらえるのです。女子学生も安心して、男子と伍して遅くまで勉強出来るわけです。もっともミシガンの冬は-5℃~-25℃にも下りますから、寒中の戸外を歩いて帰るなどということはとても出来ません。マイカーがない学生にとってスクールバスは不可欠です。

図書館はオープンシステムになっているので、学外の人も利用出来ますが、学術雑誌や重要図書の書庫へ入るには、学生とスタッフに限られ、そういう書庫の入口では身分証明書の提示を求められます。書物の管理はコンピュータ・システムによって管理されています。ユーザーは、各人の名前と番号がパンチされたプラスチックのカードをもってないと書物、雑誌の貸出しを受けることは出来ません。借りる時は、このカードと書物をコンピュータに記憶させるしくみになっています。借用期限を3日こえると、1日・1冊につき、学生は25セント、教職員は1ドル25セントの罰金をとられます。図書館の本を無断で持出そうとするような不心得者は玄関のバーを通過する時、電気仕掛で自動的に発見される装置がついています。カタログ室や索引室で、所望の書籍が見つからない時、索引係の女性に頼むと、即答出来ない場合は、タイプを打ってコンピューターのメモリーを呼び出し、当該の書籍の有無と所在をブラウン管にディスプレイして、きれいな、わかりやすい英語で愛想よく答えてくれますので非常に嬉しくなります。



利用者IDカード

書庫でも、閲覧室の開架棚には、大学の印刷所で印刷・製本した同じ装丁の本が5~10冊も並んでいるのが目につきます。教官が指定した参考書や、利用度の高いものであると思われる。

閲覧室の一隅には、防音設備のついた集団学習室というのがいくつかあり、グループによる討議や共同学習の便に供されています。マイクロフィルム室や音楽室もそなわっています。さて書庫に入ると、carrelと呼ばれる、公衆電話ボックスの2倍位の広さの個人読書室が並んでいるのも便利です。書庫から、いちいち閲覧室まで本を持出さずに、その小室で読めるからです。書庫によっては、たとえば、新刊雑誌、ジャーナルの書庫は赤いジュウタンが敷きつめているので、床にどっかり坐りこんで読書している人もいます。

書庫の入口には数台の複写機がならんでいて、1枚5セントです。その近くには自動の小銭両替機がそなえられています。別室には、無料のタイプライターがありますが、帯出出来るレンタルのタイプライターもあります。

図書館内は静粛そのもの、もちろん喫煙は厳禁で、僅かに許されている所は、集団学習室とレストルーム(便所)だけです。ラウンジでも禁煙です。レストルームといっても、広さが15坪もあろうかと思われる、全く落書きもないクリーンな室です。灰皿スタンドがそなえてあります。洗面器は温水も出、温風器もあり、まあ立派なホテルのような感じです。便所で喫煙したからと言ってわびしくなるものではありません。

日本の新聞や雑誌、あるいは本が読みたければ、北館4階のアジア図書館に行けば、東京版の朝日も日経もアカハタもあります。日本の大学職員録(昭53年版)も置いていました。

大学院図書館ツアーに参加するとrare books(稀書)にもお目にかかれます。

夜間、ここで働いている人は殆んどがアルバイト学生です。閉館前30分にアナウンスがあり、5分前には、廊下燈をのぞいて一斉に消燈し、掛員はさっさと鍵をかけて帰ってしまいます。

こういう利用しやすい図書館システムと日本人のように手元に書物をかかえこんでおかないと気がすまないという習性がないためか、教授室は、書籍に囲まれているという光景は見られませんでした。

九大の図書館システムも、今後の改善に期待したいという気持ちと、一方では予算や人員の制約で、開館時間さえも延ばせない現状を見ると一種諦めに似た気持ちがないではありません。

(はまだ・てつろう：教養部教授)

資料紹介

二次資料解説 その4

朝鮮研究文献目録 単行書篇, 論文・記事篇
末松保和編 汲古書院 昭50 2冊

本書は東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターが文献資料を共有の財産として広く研究者の利用に供するために刊行している「東洋学文献センター叢刊」のうちの一つである。しかし、このシリーズは国費刊行物としての性質上、その配布に制限があり研究者の座右に置いて利用するには不便であるという声があつた。そこで昨年か

ら研究者一般に入手の道を開き利用の便をはかるために同シリーズの影印版が市販されることになった。本書はその「東洋学文献センター叢刊 影印版」の第5と第6にあたる。単行書篇は「日本語による朝鮮研究文献目録稿本(1868~1945)単行書篇」(末松保和編纂)を母体とし、更に国立国会図書館、財団法人友邦協会、朝鮮総督府図書館、京城帝国大学附属図書館、東京大学東洋文化研究所の5機関の朝鮮関係資料の所蔵目録等を加えて東洋学文献センターが編纂し「東洋学文献センター叢刊」の第7~9輯及び第12輯として昭和45年に刊行したものの影印版である。収載範囲は明治以降昭和20年に至る間の約7千点に及ぶ日本語による朝鮮研究文献ならびに関係資料である。記入は書名ではじまり編著者、発行年、発行地、大きさ、頁数と続く。配列は若干の修正や新項目の附加があるがNDCにより分類され同一分類項内は発行年順によっている。巻末に編著者索引がついている。

論文・記事篇は「日本語による朝鮮研究文献目録稿本(1868~1945)論文・記事篇」(末松保和編纂)を東洋学文献センターが「同叢刊」の第15~17輯として昭和47年に刊行したものの影印版である。収載範囲は明治以降昭和20年8月に至る間の日本語による学術誌・論文集および若干の一般雑誌等掲載の朝鮮関係の論文・記事を網羅したものである。記入は著者名、標題、誌名、巻号、刊年、頁数の順である。配列は単行書篇と異り独自の分類配列によっている。同一分類項内は発行年順である。巻末に約140種の採録主要雑誌一覧表があり名称、発刊・停止時期及び個人をも含めて23の所蔵機関が記載されている。著者名索引はついていない。

Index to scientific & technical proceedings.

創刊年: 1978 発行頻度: 月刊(半年の累積版あり) 使用言語: 英語 タイムラグ: 約2ヶ月 発行機関: ISI

科学技術をテーマとした会議録の索引誌である。単行本、報告類、Preprints(会議での唯一の出版物であるとき)及び雑誌の中の一部として出版された会議録で、世界で出版されたものの約半を収

録している。又英語以外の言語で出版された会議録もすべて英訳されて含まれる。

当誌は Contents of proceedings を主要部門として Category index, Permuterm subject index, Author & editor index, Meeting location index, Corporate index から成っており、各 Index は Proceeding number で Contents of proceedings と関連づけられている。

Contents of proceedings : 会議録の完全な書誌情報が Proceeding number 順に掲載されている。その掲載事項は会議名、開催次、開催地、開催日、主催団体、会議録を掲載している図書名(雑誌の場合は誌名、号数、発行年)、編者、発行者、発行地、発行年、ページ数、価格、装丁、前払の可否、L.C. Number, ISBN, 図書の注文先、住所等である。更にその Proceeding の Contents が論題、著者、論文の第一著者の住所、掲載ページなどと続いている。

Category index : 会議録を書名から約200の一般的な主題のもとに配列している。その主題が学際領域にある場合、1つの会議録について5つの主題までとられる。

Permuterm subject index : 会議名、図書名及び論題の主要語から検索する。即ちタイトルを構成している主要語のひとつを見出し語(Primary term)として、他の主要語(Co-term)をその見出し語のもとに、その見出し語をふくむ他のタイトルの主要語と共にアルファベット順に配列している。それぞれの主要語に Proceeding Number が付けられている。

Sponsor index : 主催団体からの検索。主催団体のアルファベット順に Proceeding Number が付けられ、その団体が主催した会議の開催地の記述もある。

Author & editor index : 会議録の編者及び論文著者からの索引である。

Meeting location index : 開催地による索引で、国名→州名(合衆国のみ)→都市名のもとに会議名と Proceeding number が付けられている。

Corporate index : Geographic section と Organization section から成る。Geographic section : 論文第一著者の所属団体の所在地からの索引で、第一著者とその論文の Proceeding number の記載がある。Organization index : 第一著者の所属団体からその所在地への索引である。

本誌の特徴として、ISI's Book Order Referral Service(図書として出版された Proceeding の入手を ISI が代行するサービス)と、ISI's OATS(Original Article Tear Sheet) Service(一論文のコピーを OATS から入手出来るサービス)がある。後者の場合 Contents of proceedings の記入に "Individual papers are available through OATS; when ordering use accession number 00000" の指示がある。

(参考調査掛)

学内図書館だより

経済学部図書掛の移転について

経済学部は昭和24年4月新制大学発足に伴い、法文学部から単独の学部となった。昭和40年4月に経営学科が増設され、昭和52年度には、全国的に稀な経済工学科が増設され、教官、院生、学生の増員のため、従来の学舎では施設が不足の状態になっていた。

昭和54年4月新学舎の建設が決定し、人文系学部の北側の庭球コート横に、6階建の新学舎が建設されて、昭和55年6月28日に新築落成式が挙行され、8月中旬に移転が行われた。

図書掛は書庫との関連で実質的には移転をしないが、在来施設の改装工事のため、一時的に新学舎に仮移転をしている。2階の215室に目録カードと閲覧関係、4階の408室に雑誌関係、5階の509室に受入、目録関係が移っている。資料室は5階の510室に正式に移転をしている。

改装工事が終わると、従来の図書室は閲覧室として、教官、院生、学生及び外来者の閲覧に供することになり、受入、目録関係は、旧資料室、複写室等を1室に改装して業務を行う。改装工事中の書庫の利用は、文学部3階から書庫4層に入室し担当者が同行することになっている。

以上、昭和56年5、6月頃には改装工事も終って帰室する予定であるが、この間利用者の皆さんには大変不便をおかけすることになるので、ここに案内を兼ねてご報告をする次第である。 (経済学部図書掛)

利用の窓

レファレンス・コーナー (その37)

中央図書館の参考調査掛(内線2454, 2464)では、利用者の方々から寄せられるいろいろな質問に対し調査を行っている。最近の質問の中からいくつかをとりあげ、調査の過程と使用した資料を紹介したい。

質問1 昨年4月から養護学校の義務制が実施されたが、それを定めた法令を見たい。

回答例 「朝日新聞」縮刷版昭和54年3月号の索引で該当事項を確認した。関連記事により昭和54年4月実施の予告政令が昭和48年に出ていることが判明した。「日本教育年鑑」1975年版により昭和48年11月20日公布の政令第339号がそれであることがわかる。同日の官報により全文を見ることができる。

質問2 「国文学」(発行所不明)の昭和34年10月刊行第17号に柿本奨「蜻蛉日記中の歌とその詠み人」という論文が掲載されているという。コピーを入手したい。

回答例 「国文学」という誌名はたくさんあるが質問の刊年・号数に合致するものがない。書誌事項を「雑誌記事索引・人文科学篇」昭和34年により再調査すると上記論文は「国文学」(関西大学国文学会)の第27号(昭和34年10月)に掲載されていることがわかった。同誌は中央図書館が所蔵している。

質問3 生化学関係の教授①E. A. Newsholmeと②C. Startの住所を知りたい。

回答例 「Who's who in science in Europe」2. ed. 1972で①は判明。②は各種人名辞典に載っていないので「Who is publishing in Science」を検索すると1971. ed.に①と同じくUniv. of Oxfordに所属している。更に「Science citation index」1970/74ed. Source indexにより②は①と共著でFEBS Letters 6(3)1970に論文を発表しており同誌を見ると前述の所属が明記さ

れている。なお「SCI」Source indexの著者に所属(住所)が併記されるのは1977 ed.以降である。

質問4 Walcot, Peter: The specialisation of labour in early Greek society — REG 80(1967) pp. 60~67という論文を入手したい。

回答例 REGというタイトルの雑誌はなく、誌名のイニシャルと思われる。「Social science citation index」(本館は1969 ed.から所蔵)のCitation indexを1969 ed.から検索すると、1977 ed.のWalcot, P.の項に“61 REV GRECQUES 74”とあり著者が1961年にもRevue des Etudes Grecques誌に論文を発表していることがわかる。質問の号数・刊年が80(1967)と74(1961)とそれぞれ対応するのでREGとは前述の雑誌名のイニシャルと思われる。「学術雑誌総合目録・人文科学欧文篇」によれば京大が所蔵している。

質問5 「計測法」という単行本に「ガス濃度測定に関して熱線式の磁気酸素計」という記述があった。このことについて詳しく知りたい。

回答例 「計量技術ハンドブック」「化学技術便覧・応用編」等で検索し該当用語「磁気酸素分析計(Paramagnetic oxygen analyzer)」「気体濃度 — 磁気的方法」等を紹介。更に「日本化学総覧」Vol. 48の年間索引に酸素—ガス分析計||磁気検査||磁気消去960001748とあったのでその抄録と、原報の特許公告38280(昭48)を紹介した。

昭和54年度図書館統計

— 昭和55年度大学図書館実態調査報告から —

部 局	蔵 書 数									年 間 受 入 数								
	図 書			雑 誌			図 書			雑 誌			新 聞					
	和	洋	合 計	和	洋	合 計	和	洋	合 計	和	洋	合 計	和	洋	合 計			
中央図書館	冊	冊	冊	種	種	種	冊	冊	冊	種	種	種	種	種	種			
医学分館	246,084	56,952	303,036	4,523	1,636	6,159	15,864	2,742	18,606	1,397	539	1,936	52	12	64			
教養部分館	101,726	126,749	228,475	1,517	2,855	4,372	3,304	4,954	8,258	731	1,426	2,157	21	2	23			
文学部	137,798	68,330	206,128	1,104	837	1,941	5,625	3,791	9,416	656	539	1,195	16	2	18			
教育学部	211,107	101,172	312,279	2,413	779	3,192	4,840	2,802	7,642	1,267	421	1,688	9	3	12			
法学部	28,172	31,797	59,969	480	329	809	830	1,345	2,175	398	192	590			2			
経済学部	90,943	114,414	205,357	739	659	1,398	2,657	2,443	5,100	508	361	869	9	6	15			
理学部	93,432	71,824	165,256	2,510	1,805	4,315	3,069	5,078	8,147	627	312	939	43	8	51			
薬学部	28,746	78,028	106,774	1,188	2,204	3,392	660	3,141	3,801	1,025	1,659	2,684						
工学部	4,567	9,786	14,353	158	190	348	164	337	501	101	115	216	4		4			
農学部	106,528	148,425	254,953	1,360	2,215	3,575	3,629	4,205	7,834	1,126	1,401	2,527	16	1	17			
大学院総合理工学研究科	110,864	109,859	220,723	3,068	3,245	6,313	2,499	2,539	5,038	1,130	1,045	2,175	32	3	35			
温泉治療学研究所	18,705	22,222	40,927	145	322	467	159	178	337	43	27	70	2		2			
応用力学研究所	4,608	4,722	9,330	313	166	479	198	332	530	132	112	244						
生産科学研究所	13,308	13,391	26,699	726	558	1,284	559	1,062	1,621	586	400	986	9	1	10			
石炭資料研究センター	3,853	5,587	9,440	519	121	640	101	396	497	379	83	462						
大型計算機センター	17,494	2,796	20,290	354	20	374	514		514	212		212	2		2			
健康科学センター	995	996	1,991	29	49	78	75	120	195	24	26	50	4		4			
事務局	927	219	1,146	290	17	307	53		53	133	5	138	14		14			
合計	3,180	419	3,599	348	187	535	50		50	150		150	11	3	14			
合計	1,223,037	967,688	2,190,725	21,784	18,194	39,978	44,850	35,465	80,315	10,625	8,663	19,288	244	43	287			

部 局	奉 仕 対 象 者			館 外 貸 出 人 数				館 外 貸 出 冊 数			
	学 生	教 職 員	合 計	学 生	教 職 員	学 外 者	合 計	学 生	教 職 員	学 外 者	合 計
中央図書館	人	人	人	人	人	人	人	冊	冊	冊	冊
医学分館	11,561	4,731	16,292	15,890	875		16,765	23,144	1,309		24,453
教養部分館	1,939	2,427	4,366	7,055	10,273		17,328	12,404	24,002		36,406
文学部	4,627	314	4,941	4,664	1,184		5,848	5,720	6,107		11,827
教育学部	447	103	550	4,200	500	50	4,750	6,350	4,030	95	10,475
法学部	178	53	231	1,190	282	56	1,528	2,903	1,037	208	4,148
経済学部	600	68	668	654	314	245	1,213	2,232	1,231	922	4,385
理学部	514	73	587	469	339	227	1,035	2,767	1,184	677	4,628
薬学部	933	340	1,273	13,515	4,953		18,468	22,162	9,496		31,658
工学部	264	88	352	885	593		1,478	1,169	957		2,126
農学部	2,027	717	2,744	10,847	6,800	418	18,065	33,867	32,485	950	67,302
大学院総合理工学研究科	739	385	1,124	3,659	1,236	89	4,984	6,618	2,227	186	9,031
温泉治療学研究所	179	109	288								
応用力学研究所	15	166	181		230		230		250		250
生産科学研究所	13	109	122	202	2,154		2,356	466	11,379		11,845
石炭資料研究センター	63	72	135	113	69	22	204	153	105	28	286
大型計算機センター	11,561	4,731	16,292	20	45	18	83	32	146	43	221
健康科学センター				60	356	4	420	97	486	4	587
事務局				3			3	8			8
合計				63,426	30,203	1,129	94,758	120,092	96,431	3,113	219,636

◆ 研 修

大学図書館職員長期研修に参加して

井 上 絢 子

〈とき：昭和55年8月4日～23日 場所：東京学芸大学ほか〉

1. はじめに

当研修は、大学図書館業務の合理化、機械化、研究者の要求に即応した情報提供サービスの質的向上・整備に必要な最新の知識、技術等を教授・習得させるため、文部省学術国際局が昭和41年より行っているものである。第12回の本年度は、東京学芸大学の共催、東京大学、筑波大学、電気通信大学、一橋大学、慶応義塾大学、図書館情報大学、国立国会図書館、日本科学技術情報センター、国文学研究資料館、日本電信電話公社の協力の下に、全国から36名（自然科学18名、人文・社会科学18名）が参加して行われた。関係各位、留守中の仕事をカバーして下さった農学部図書掛の皆さんに御礼を申し上げると共に、以下そのあらましをお知らせする。

2. 研修内容（日程順）

- ※ 大学における図書館の役割（津田良成 慶応義塾大学教授）
- ※ 大学図書館行政（佐藤保男 文部省学術国際局情報図書館課長補佐）
- ※ 教育における情報（稲森潤 東京学芸大学附属図書館長）
- ※ 学術審議会答申の解説（田中久文 文部省学術国際局情報図書館課専門員）
- ※ 大学における研究活動と図書館（市川惇信 東京工業大学総合理工学研究科教授）
- ※ 書誌情報の国際的標準化の動向（丸山昭二郎 国立国会図書館収書整理部主任司書）
- ※ 大型計算機センターにおける実験的試行（石塚英弘 国文学研究資料館研究情報部助教授）— TOOL-IR（東京大学）の操作実演
- ※ コンピュータの現状と可能性（森健一 東芝総合研情報システム研究所主任研究員）
- ※ 図書館業務機械化トータルシステムの研究（井上如 東京大学情報図書館学研究センター助教授・根岸正光同センター講師）
- ※ データ通信網(DDX)の意義（本合紘 日本電信電話公社データ通信本部総括部調査役）
- ※ 図書館における情報源 — 人文科学系（田沢恭二 東京学芸大学附属図書館整理課目録係長）
- ※ 同社会科学系（大橋渉 一橋大学社会学部助手）
- ※ 同自然科学系（小川治之 慶応義塾大学理工学情報センター課長代理・佐藤和貴 同大学医学情報センター情報サービス担当係主任）
- ※ 共同研究討議（田辺広 一橋大学附属図書館事務部長・雨森弘行 横浜国立大学附属図書館整理課長）
- ※ 参考業務の実際 — 生物・医学系（佐藤和貴）
- ※ 同理工学系（小川治之）— 演習及びJOISの操作実演
- ※ 新しい機械化の一形態（石井啓豊 東京学芸大学附属図書館収書係長）
- ※ 大学図書館建築（栗原嘉一郎 筑波大学芸術学系教授）
- ※ MARC利用システムの研究開発（上田修一 筑波大学学術情報センター電子情報工学系講師・中山和彦同センター長）— IDEAS（筑波大学）の操作実習
- ※ 諸外国における情報システム（上田修一）
- ※ 新しい図書館情報専門家の養成（松田智雄 図書館情報大学長）
- ※ 著作権に関する国際的動向（田原昭之 文化庁著作権課長補佐）
- ※ 企業における調査活動（竹内宏 長期信用銀行調査部長）
- ※ 所在情報の形成とその問題点（柴田正美 東京大学情報図書館学研究センター情報処理掛長）
- ※ 専門職能論（本明寛 早稲田大学教授）

3. 見学先 (日程順)

東京学芸大学附属図書館, 日本電信電話公社, 慶応義塾大学医学情報センター・同理工学情報センター, 電気通信大学附属図書館, 筑波大学附属図書館・同情報処理センター等, 図書館情報大学, 国立国会図書館, 日本科学技術情報センター (JOIS 操作実演あり), 国文学研究資料館

4. 特に学術情報センター設立の件について

本年1月に出された学術審議会の答申「今後における学術情報システムの在り方について」は, ①我が国の学術情報流通システムの現状分析—一次情報の収集整備と提供システム, 情報検索システムの改善及びデータベース形成, ②新たに確立すべき学術情報システムの方策, 機能, 構成機関群の役割, 整備, ③専門要員養成等を述べたものであり, 今後の施策は答申に基いてなされることとなる。即ち新学術情報システムは, 連絡調整, 計画, データベースサービス, 研究開発, 教育訓練等の諸機能を持つ中枢センターと情報検索の窓口, 一次情報の収集, 提供, 所在情報形成の分担機能を持つ各大学等の図書館, 一次情報の収集, 提供, 所在情報の形成機能を持つ分野別拠点図書館, 各大学等の計算機センター, 研究室, 共同利用研究機関等をコンピュータで接続するネットワーク構成である。具体的施策として, 中枢センターである「学術情報センター」の設立は下記の通りとなるもようである。

1. 場所 東京都千代田区竹橋 (一橋講堂跡地 約4,500m²)
2. 定員 50名前後
3. 昭和56年度 建物設計, 57~58年度 ソフトウェア開発, 建物工事・付帯工事,
59年度 工事完了, プログラムテスト

5. その他

各大学図書館は, きわめて冷静に現状分析を行っており, 本来の使命・任務に照らし鋭い洞察力を以て近い将来の課題・指針を見出している。学習図書館としての附属図書館ないしは中央図書館と, その機能・使命を明確に区別して, 研究図書館(学部図書館)・研究図書室(学科図書室)充実の動きもその一つである。資料そのものの集中管理は必ずしも必要ではない。その資料を真に利用する必要がある研究室, 研究者の許に置いておくことによって完全な利用が出来る。所在がはっきりしていれば良い, 即ち管理情報は把握しておく必要があるということが, 講師の意見としてあった。そのほか, 図書館は空間的には研究者のすぐ近くに, むしろ研究室の中にあってほしい, という意見も聞かれたが, これらは, 研究者の存在を認識しない大学図書館の運営に対しては警鐘の一つとなるであろう。アメリカの大学の研究図書館でなされている0次情報 (Informal Communicationとしての学術情報—1次情報抽出以前の情報) の資源化は, 仲々に困難ではあるが, 今後における新たな課題を示唆している。又, 見学等では, 自館の不備な個所を良く見て帰り, 今後の参考にしてほしいとする大学もあり, その視点の高さ, 共に前進して行こうとする姿勢に心打たれるものがあった。

(いのうえ・あやこ: 農学部図書掛)

第15回医学図書館員研究集会に参加して

今 林 安 雄

「医学図書館とコンピュータ」という統一テーマの中の「目録」というサブテーマで, 8月27日から29日まで3日間, 東京慈恵会医科大学高木会館において研究集会が行われ, それに参加したわけですが, 研究集会で感じたことを思いつくままに書いてみます。

まず第1に, 一講義に与えられた時間が短い時間的にゆとりがなく, 概略だけで終わってしまったように思われる講義があったので, 例えば研究集会の日程を少し長くするとか, 講義項目を減らし一講義に与える時間を長くすることにより, もう少し時間的にゆとりを持たせてほしい。

第2に, コンピュータの進歩は日進月歩であり, この中で図書館業務をより機能的, 合理的に遂行していくために, 大学及び図書館は, ある程度コンピュータを理解できるように職員を養成していく必要があるのではないのでしょうか。

第3に, 3日目の最後の時間に参加者を3グループに分け, それぞれのグループで自由討議が行われた

わけですが、私の所属しているグループでは、まず今回の研究集会に参加して感じたことを話し合い、次に、日常業務の中で図書館が抱えている問題を提起し、その問題についてそれぞれの図書館ではどのように対処しているか意見を交換しました。それぞれの図書館が、抱えている問題を提起し、その問題を他の図書館がどのように対処しているかを知ることにより、それを参考にそれぞれの図書館が問題を解決していく。このような機会を持つことは非常に大切なことだと思います。

今回の研究集会には63名が参加しました。その中には、図書館での勤務年数が長い人もいれば短い人もいるし、今回のサブテーマである「目録」の経験がある人もいれば、全くない人もいます。だから、63名ひとりひとりが講義で得た知識には多少違いがあるでしょう。しかし、私は講義で知識を得ることばかりでなく、図書館職員相互の会話の中で、講義では直接学ぶことができないことを学ぶことも大切なことではないかと思いました。この点から見れば、研究集会に参加した意義はそれなりにあったように思います。

(いまばやし・やすお：医学分館目録掛)

第1回大学図書館研究集会 — 学術情報の流通とレファレンス・サービス —

花 田 洋 子

〈とき：昭和55年9月18～19日 ところ：横浜市開港記念会館〉

今日における学術研究の急速な発展は、学術情報の量的増大と質的多様化をもたらすと共に研究者のニーズをも同時に増大させ多様化させ、更に通信回線による情報の機械検索はこの傾向をいっそう強く推し進めている。この様な状況の中で大学図書館が、特にその研究図書館としての使命を達成するためには個々の図書館の枠をこえて、大学図書館全体として学術情報の流通機構を形成しその機能を充実させることが強く望まれる。そのためには図書館間における相互協力活動とりわけ相互利用活動（直接利用、現物貸借、複写利用）を積極的に推進することが不可欠であり、これを大学図書館における基幹的業務として位置づけ地域や学問分野をこえたトータルシステムとして制度化していくことが必要である。相互利用活動の基盤を支えるものの一つとして文献の書誌的事項の確認や所在調査などを中心とするレファレンス業務がありその意味においてレファレンス・サービスの充実が強く要請されている。

今回の研究集会は以上のような視点から全国の国・公・私立大学図書館においてレファレンス・サービスを担当している実務者が一堂に会して相互利用活動推進のための具体策について討議し今後への展望を開こうとして計画されたものである。参加者は119機関、165名、勤務年数年平均12年、レファレンス業務経験平均5年で、大学図書館の中でほぼベテランの位置にあると思われる。

第1日目は特別講演及び基調講演に続いて分科会が人文・社会科学系、理工学系、医学・生物学系の3つに分かれ、更にそれらが20名前後の班にわけて行われた。私が参加した理工学系分科会では各人がレファレンス業務を行うにあたり現在直面している問題や日頃考えていることなどを述べ、続いて①日常よく使用している入門書、ハンドブック②書誌事項確認のために頻繁に使用している二次資料③所在調査のために頻繁に使用している二次資料について前もって提出していた各人の回答をもとにしてリストアップした資料により質問や説明、補足などを行った。

第2日目は前日に引き続き行われた分科会で国立国会図書館から同館の科学技術文献の網羅的収集計画についてその経緯と今後の方針の説明、東京工業大学から「自然科学系拠点図書館外国雑誌目録」について、筑波大学からTULIPSによる図書館業務のトータルシステム構想についてそれぞれ報告があった。午後は全体会で各分科会のまとめが報告されたが第1分科会で活発な意見が出された模様でその余熱が感じられる全体会であった。総括では相互協力とは相互互恵であるという観念を破棄する必要があると特に拠点図書館による共同利用は相互協力の階層性を示しているといったことが述べられ更に①レファレンス業務が組織的に確立していないことから量的にも質的にも担当職員が不足②予算上の制約、新設大学では歴史的蓄積の不足からレファレンス・ツールが不足③相互利用に関するルールが確立していない等が相互利用活動を阻むものとして挙げられ、その対応策として①業務の合理化・省力化②レファレンス・ツールの分担収集③相互利用に関するルールの作成等が必要であると述べられた。

分科会の時間が足りず、各人がその意見を十分に述べあうには至らなかったし、要求する側からの発言は多かったが逆の立場からの意見はあまり出されなかったようではあったが、大学図書館の相互利用活動がこの研究集会を足がかりとして今後力強く推進されて行くであろうと確信している。

(はなだ・ようこ：附属図書館参考調査掛)

「学術雑誌総合目録 欧文篇」データ更新について

「学術雑誌総合目録」は学術雑誌の全国的所在状況を把握し各図書館間の相互利用に資するため、文部省監修のもとに回を重ねて改訂刊行されている。

欧文誌については、昭和53年の調査データをもとに編集された総合目録が、自然科学篇は昭和54年3月に、人文・社会科学篇は本年8月末に冊子体として出版された。

しかし、学術雑誌総合目録が図書館業務の有用なツールとして十分であるためには、そのデータが常に最新のものであることが望ましい。そこで今回、昭和53年以降の新規受入分を対象とする両篇のデータ改正をめざして、全国的データ調査が行われることになった。これらのデータ・ベースの作成編集は、人文・社会科学篇に引き続いて東京大学情報図書館学研究センターによってなされる。このためのデータ提出に伴う記入説明会が去る9月5日、大阪大学附属図書館吹田分館で開かれ、中央図書館洋書目録掛からも一名出席した。本学では、これを受けて9月19日に関係担当者への説明会をもち、各学部図書掛(室)でタイトル毎にチェックをした後、データ用紙への記入にはいる予定である。

今回は従来と異り、人文・社会科学篇と自然科学篇のデータが同時に機械編集に組みこまれるが旧調査時点以降の新規受入分のみが追加され、前回報告された所蔵データの修正は行われない。

センターの日程計画によれば、11月末のデータ提出メ切の後、データ編集、旧データ・ベースへの追加更新を経て、冊子体目録の刊行は昭和56年11月以降ということである。現場の状況からすれば、一日も早い改訂版総合目録の刊行は言うまでもなく、さらに所蔵データ修正の実施が強く望まれる。

(附属図書館洋書目録掛)

九州大学附属図書館商議委員会 (第117回)

〈とき：昭和55年7月14日 ところ：附属図書館視聴覚室〉

議 題

1. 昭和55年度予算について

報 告

1. 九州大学図書館業務の電算化計画の経過について

図書館商議委員会委員の交替 (55.7.1)

旧	新
高野 桂 一 (教育)	前田 重 治 (教育)
西田 越 郎 (文)	森 洋 (文)
手島 孝 (法)	林 迪 広 (法)
谷川 栄 彦 (法)	原 島 重 義 (法)

◆ 人事異動

附属図書館長の異動

岡村繁館長の任期満了(7月15日付)に伴い、塚原博農学部教授が新たに館長に就任(7月16日付)した。

◆ 日 録

会 議 等

7. 8 分館長会議

14 図書館商議委員会 (第117回)

9.5-6 学術雑誌総合目録欧文篇データ更新記入説明会 於大阪大学

9.18-19' 第1回大学図書館研究集会 於横浜国立大学

25 国立七大学附属図書館部課長会議 於北海道大学

26 第54次国立七大学附属図書館協議会 於北海道大学

編集委員 主査・長谷川 信彦・委員・花田 洋子, 原 一義, 岸本 澄夫, 舟越 俊允(中央図書館), 出島 照義(医学分館), 伊藤 繁行(教養部分館), 友納 昭二(経済), 三嶋 博義(工)

九州大学図書館報「図書館情報」Vol. 16, No. 3(通巻119)

1980年9月30日発行・発行人 沙藤 隆 茂

発行所 九州大学附属図書館・福岡市東区箱崎6丁目10番1号・〒810②・電話代表(641)1101 内線2454